



Title	『1900年頃のベルリンの幼年時代』における回想の問題
Author(s)	園田, 尚弘
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1994, 34(2), p.127-134
Issue Date	1994-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/15334
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-24T16:17:43Z

『1900年頃のベルリンの幼年時代』における回想の問題

園 田 尚 弘

Die Erinnerung in der "Berliner Kindheit um 1900" von W. Benjamin

NAOHIRO SONODA

はじめに

本稿は、『1900年頃のベルリンの幼年時代』について、とくに回想の問題を中心に
して論ずる。テキストは『幼年時代』最終稿にもとづく。G・アガムベンによるパリ
の国立図書館収蔵調査によって発見された最終稿の権威によって、アドルノやレクス
ロートの編集による『幼年時代』のテキストを批判する意図はもたないが、しかし
「せむしの小人」との関連でテキスト配列の問題について少しく触れざるを得ない。

1

ベンヤミンの生前には刊行されることのなかった『ベルリンの幼年時代』は、1950
年、アドルノの手で一本として出版された。アドルノは、ベンヤミンが生前、さまざ
まの新聞、雑誌に発表した散文を蒐集・配列して、「ティアガルテン」ではじまり、
「せむしの小人」で終わる『ベルリンの幼年時代』のテキストを出版したのであった。

1972年には、『ベルリンの幼年時代』の原型にあたる『ベルリン年代記』が、G・
ショレムの手で出版された。この本の出現によって、読者は、幼年時代から青年時代
までのベルリンにまつわる回想録が、『ベルリンの幼年時代』のきびしい短章群へと
彫琢されていった経過を知ることになった。1972年に出版されたベンヤミン全集の第
四巻に収められたティルマン・レクスロートの編集による『ベルリンの幼年時代』は、
アドルノの版に、さらに幾つかの短章をつけ加え、都合41編を含んでいる。そして先
に述べたアガムベンの調査による最終稿の発見があって、この最終稿が1987年に出版
された。これによって、「歩廊」にはじまり、「せむしの小人」で終わる、ベンヤミン
自身の手で各短章が配列されたテキストが読者の前に姿を現すことになった。

B・ヴィテは、この最終稿に基づいて、テキスト全体の短章の配列・構成の必然性、
ベンヤミンの構成意図を探っている。全体の構成をめぐってこれまでベンヤミン研究

者たちが考究してこなかったのは事実である。そしてまた、「ティアガルテン」を冒頭におくテキストをベンヤミン自身は計画しなかったということもありうるかもしれない。しかし、たとえば『ベルリン年代記』とのつながりから考えると、「ティアガルテン」を最初の短章とするテキストをアドルノたちが作成したのもあながち不明のなせるわざともいえないように思われる。

それにしても反省させられるのは、ベンヤミンが『ベルリンの幼年時代』の一応の完結を伝えた手紙の読解を多くの研究者がまちがってきた事態である。ベンヤミンは1933年2月28日の書簡で「せむしの小人に見合う最初の短章を書きあげて、30の短章が揃ったことで一応完結をみたことを告げている。その際、ベンヤミンは、最初とみなされる短章執筆の際、言語論、『物真似の能力』が副産物として生まれたと書いている。『物真似の能力』に現れる文章が、そのままの形で「ムンメレーレン」にも同じように現れている点、さらに民謡の一節を短章の決定的モチーフとする点、二つの短章の似かよった雰囲気、19世紀とのつながりを強調した点を総合して考えてみると、ベンヤミンが手紙で述べている最初の短章とは、「ムンメレーレン」に他ならないことが容易に推察できたはずである。しかしこれを「ティアガレテン」あるいは「クリスマスの天使」を指すと述べている書物がみうけられる事実は指摘されねばならないだろう。

2

『ベルリンの幼年時代』の序言によって、ベンヤミンがなぜこの著作を書いたかがかなり明らかとなる。アドルノやジョンディによって、つとに指摘されてきたことだが、この著作にナチズムの黒い影がおおいかぶさっていることは、序言の冒頭の部分からも読みとれる。彼は、そこで、1932年、外国にあったとき、まもなく自分が生まれ故郷を後にしなければならないという予感をもっていたこと、亡命の地であって意気阻喪していたときに、内的に健やかにしてくれるものとして、幼年時の回想にすぎたことを伝えている。同時に、幼年時代へのあまりにも痛切な憧憬の念に圧倒されないように、社会的必然性への洞察によってそれに歯止めをかけたことを記している。だからこれはベルリンと銘打ってあっても、学術的都市論でもなく、旅行案内書でもなく、幼年時代を扱った一種の回想録である。一種のというのは、それがたんに自分の人生について、あるいは幼年時代について年代記風に、そして平板な叙述によってものされたものではなく、それが緊密な彫琢された散文で書かれた短章から成る回想の書であるからである。

『ベルリンの幼年時代』における回想(Erinnerung)の重要性は、短章群の構成からもうかがうことができる。第一番目の短章は、「歩廊」と題されている。それは、

母—人生、幼児—回想の隠喩ではじまっている。「生まれたばかりの子供の目をさまさないように胸に抱く母親のように、人生は長いあいだ、子供時代のまだ甘美な思い出をそんなふうに出すのだ」

母親が幼な子を目ざめさせずにぐっすりとお眠らせるために気づかうのと同様に、長い期間にわたって、人生は思い出（回想）を手つかずのままに残しておく。思い出はまだ眠ったままなのである。ベンヤミンは眠ったままの記憶を呼びおこし、「記憶の深み」に潜行しようとする。つまり「歩廊」は、この記憶の深みへの探索行の開始を告げる書である。そのとき語り手の記憶にもっとも親しみ深く、生々と訴えかけてくる記憶が、中庭(Hof)を見渡せる歩廊に関するものである。歩廊は語り手にとって、「揺り籠」であった。子守り唄を歌ってくれたのは、歩廊を支えるカリアチードの像、そしてそれらの神話からの像が歌ってくれた言葉は、それと結びついた歩廊の空気によって、幼な子を非常な幸福感で満たしてくれたのだった。

中庭を見おろす歩廊にまつわる回想は、新生児から、就学前と生徒の時代を経て、成人後の時代にわたっていて、短いながらひとりの男のポートレートを表現している。ベンヤミン自身の評言によれば「これらのページは、私自身によって書かれた一番正確なポートレートを含んでいる。」¹⁾

しかもこの男は、宮廷(Hof)を眺め、離れた領地(provinz)をもっている。そして歩廊そのものが「霊廟」に擬せられている。彼はいわば王なのである。この短章は、最高の雰囲気をもった回想で始められているのである。

『ベルリンの幼年時代』最終稿ではこの「歩廊」が最初におかれているが、「ムンメレーレン」を最初にもってくる計画もあった。しかしいづれの計画にあっても、「せむしの小人」が最後に来ることだけは決定していた。

ボードレールがその「航海」において、

ああ、ランプの光のもとでは世界はいかに大きいことか

しかし追憶の目をもって見るといかにその小さいことか

と歌ったごとく、庭が小庭に、部屋が小部屋に、ベンチが小さいベンチに変わるまでに、ものは縮小してしまったとベンヤミンはいう。それらのものからは背中のこぶがでてきて、小人にくっつけられると形容される。ベンヤミンの『カフカ』論にも現れてくるせむしの小人は、ここでも忘却の寓意なのである。「小人は、いつでも私の先まわりをした。先まわりをして私の邪魔をした。けれどもそのほかには、この灰色の代官は、私に何もしなかった。私が手に入れたすべてのものから、忘却という半分をとりたてる以外には。」この文章は、『ベルリンの幼年時代』が、このせむしの小人によって奪われた忘却をとりもどす試みであることを告げている。「小人の仕事は終わった」とこの短章の末尾にベンヤミンが書きつけたとき、それは忘却された記憶、

「歩廊」において眠ったままの記憶といわれた記憶をとり戻したということを述べているのだ。断章『パリ、十九世紀の首都』の最後の章で全体が総括的に回顧されるように、「せむしの小人」の章の最後でも、『ベルリンの幼年時代』全体が回顧されている。「小人はいつも私を見ていたのだ、隠れ場所で、川瀬の檻のまえで、冬の朝に、台所の廊下にあった電話の前で、蝶を追ったブラウハウスベルグで、吹奏楽に合わせて滑ったスケート場で。」

このようにみえてみると、『ベルリンの幼年時代』は、手つかずのままに残されている記憶について語ることからはじめ、自らのポートレートを提示する最初の短章「歩廊」と回想の終りをつける「せむしの小人」によって枠づけられた、入念に計画された書物なのである。

3

30編の短章は、それぞれが独立したかたちをとって読者の目の前に現れる。B・ヴィテが指摘するように、その手法は、「カイザーパノラマ」で描かれる、あの五十の絵が、間を置いて次々に子供の目の前に現れるパノラマ館の方式になっている。2)回想されている1900年前後のベルリンは、普仏戦争後、フランスからの戦後賠償によって潤った、経済的好況の波にのるドイツ帝国の大都会である。子供たちは、パノラマ館に出入し、動物園を訪れる。富裕な家のなかでは、養育掛りや家政を助ける女たちが働き、実用化されたばかりの電話も具えられている。避暑旅行がなされ、郊外に夏用の住まいも用意され、子供はそこで自然との一体感を味わう。街には凱旋記念塔があり、ティアガルテンは、フロイラインに伴われてゆく散歩の場所である。

ところで、それら、『幼年時代』の場所は、ベンヤミンの回想のなかで、神話化された特別の場所である。ティアガルテンが迷宮の神話に彩られた大都市のミニアチュアモデルであると同様、例えば「マルクト・ハレ」は「しきい」としての重い回転ドアを通り抜けると、バッハオーフェンの太古の神話の世界を現出させる。あるいは「呼鈴がここでほど親しげになるところはなかった」と形容される母方の祖母の家の内部は、「極楽」であり、「冥土」でもある。子供が恵みの雨に打たれながらこのうえない浄福感を味わう「川瀬」の棲み家は、「神殿」のある特別な空間である。大都市の迷宮に魅きつけられる子供にとって、地底は特別の意味合いをもっている。例えば、「歩廊」においても地下への興味が暗示され、「せむしの小人」は大都会の地下室の住民たちと結びつけられている。

『幼年時代』の世界にはまず安らぎ、安定感が漂っている。その安定感は母の姿と結びついているように思われる。母方のおばをめぐる描写、母方の祖母をめぐる叙述は、プルースト的世界に近い雰囲気をかもしだしている。安らぎは、「ブルーメスホー

フに」ではたとえば次のように描写されている。幼いベンヤミンが母方の祖母の家を訪れて、呼鈴を鳴らす。そしてベンヤミンは回想する。「この家の敷居をまたぐと、わたしは父母の家にさえないような安らぎを覚えた。」この住居からは非常に古くからあるブルジョアの安定感が漂ってくる。しかしこの安定感は、死や悲惨を閉め出すことで成り立っている類の安定感である。それはベンヤミンが幼児期を過ごしたアルター・ヴェステン地区が、貧民を閉め出した富裕なブルジョアの住む地域であったことにみあっているのかもしれない。

『ベルリンの幼年時代』はこのような負の要素を抑圧した安定感を基調に、子供が抱く違和感、勝利と敗北感、失意、不安と恐怖を回想として伝えている。

しかしながら、たとえば「ここで続いた諸芸術は、20世紀とともに死滅した。それがはじまったとき、この芸術は子供のなかに最後の観客をもったのだった。」(カイザーパノラマ)といったコメンタール風の文章、あるいは、「凱旋記念塔は大きな広場に、日めくり暦の赤い数字の日付けのように立っていた。それは最後のスダンの日が終わったときにめくり捨てられるべきだっただろう」といった文章は、回想された子供の思考なのだろうか。普仏戦争後の世界を評しては、「およそフランス人の敗北とともに世界史はかれらの栄光ある墓穴のなかに通じる道ではなかったろうか」と述べられる。これらの文章は、幼児期を回想する成人の社会批判的視点に立っている。「記憶の直接性」(アドルノ)にその素材を仰ぎながら、『パリ・19世紀の首都』の文章にも見合う歴史哲学的論点が顔をのぞかせている。

4

ところで回想(Erinnerung)は、ベンヤミンにあっては、発掘に比せられる行為である。自らの過去に近づこうとする人間は、過去の遺跡を発掘しようとする考古学者のように、過去の体験にむかわねばならない。

『発掘と回想』においてベンヤミンは回想する者の姿勢について次のように説明する。

「ことばというものによって誤解の余地なく解明されたことであるが、記憶は過去を探知するための用具ではなく、むしろ媒体(Medium)である。古い都市が埋まっている大地が媒体であるように、それは体験されたものの媒体である。。自分の埋められた過去に近づこうと思うものは、発掘する男のような態度をとらなければならない。とくに、くりかえし同一の事実関係にたちもどることをためらってはならないし、土を振りまくように、その事実関係をまきちらし、地面を掘り返すみたいにその事実関係を掘り返すことをためらってはならない。なぜなら事実関係は、単なる地層にすぎず、入念な探求によってはじめて、そこから発掘の名に値するものを、取り出せるの

だ。つまりそれはイメージなのだが、そのイメージはあらゆる過去の関係から切り離され、一ちょうど収集家の陳列品に置かれた断片やトルソのように一わたしたちの後日の認識という醒めた部屋に貴重品として収められている。計画にしたがって発掘することも有益である。しかし暗い地面に用心深く、まさぐるようにスコップを入れることも同じように必要である。発掘物の目録だけを作成し、今日の地面に、古いものが保存されている場所を記録しないものは、最高のものを自ら逸しているのである。それゆえ真の回想は、報告的になされるのではなく、探求するものがその回想をものにした場所を正確に記述しなければならないのだ。』3)

ベンヤミン初期の言語論以来保持されてきたメディウムとしての言語という捉え方と同じく、ここでは記憶はメディウムとして述べられている。回想はそれゆえ、不動の過去の貯蔵所を聞くという行為ではないのだ。『ベルリンの幼年時代』を構成する三十の短章も、こうした作業から取り出されたイメージ群なのである。

5

ションディのひとつのベンヤミン論が「過去のなかの希望」と題され、また『未来への回想』というタイトルの『ベルリンの幼年時代』に関する研究書が出されていることから推察されるように、ベンヤミンの回想は、例えばブルーストにおける場合とちがって、未来の不安を逃れるためになされる過去への遡行ではない。ベンヤミンは過去における未来を求めている。個人的に未来がすでに予告されている幼時の願望もあるし、あるいはすでに全体主義政治の下でのユダヤ人襲撃を予感させる事件の回想もある。「川瀬」の章には、未来を予見させる力をもつ植物があるように、未来を予見させる力をもつ場所があると述べられる。ベンヤミンの回想がおもむく場所は、「来るべきものの兆候」を帯びているのである。

幼年時代に親しいモチーフとして迷宮のモチーフがある。ベンヤミンにとってそれはティアガルテンを場としている。子供の神話の中心を占める迷宮をめぐる回想は、現代都市の神話につながってゆく。ベンヤミンにとって、神話としての現代都市は、パリとして現れた。パリは迷宮というより「地底の迷宮」であった。「ティアガルテン」の章の冒頭で名ざされているのは、パリである。幼年時代の神話的空間であったティアガルテンとその周辺一体は、パリのフラヌリーを経たベンヤミンにとって、相変わらず古代の神話と重なり合う。「門口を護る神々の像の徴をおびると、ベルリンのアルター・ヴェステンは古代の西方となった。そこから西風が舟人を運び、その舟人たちはヘスペリスの娘たちのりんごを川舟にのせてゆっくりとラントヴェア運河を遡り、ヘラクレス橋のたもとに留まるのである。すると、わたしの幼年時代のおりにグローサー・シュテルン広場をかこむ荒地には、またもやあのヒュドラとメネシス

の獅子が座を構えているのであった。」

幼年時代を回想するベンヤミンにとって、幼年期のまなざしは後年のその原型、あるいは来るべきものへの先取りとなっている。

6

「わたしの願いは、自分のことを語るのではなく、時代のあとをたどり、時のざわめきとその芽ぶきを巡ることだ。わたしの記憶はあらゆる個人的なものを憎む。もし思いのままになるなら、わたしは過去を紐解きながら、ただ顔をしかめるだけだろう。わたしは叙事詩的なつれづれの思い出をかきつらねた家族代々の記録に熱中するトルストイ家やアクサーコフ家の人々、パブロフの孫たちを決して理解することができない。くり返そう。わたしの記憶は愛情ではなく、憎しみにみちており、過去を甦らすためではなく、過去を遠ざけるために働くのだ。雑階級人にとって、記憶は無用である。彼には自分の読んだ本のことを語ることでこたたり。それで伝記は完成するのだ。」(マンデルシュタム・『時のざわめき』) 長い引用になったが、ベンヤミンの『ベルリン年代記』、あるいは『ベルリンの幼年時代』における過去への態度を考えるうえで有益だと思えたからである。マンデルシュタムは雑階級のひとりとして「記憶は無用である」と書く。大都会のブルジョアジーの出身であるベンヤミンにとって、ロシアの名家の家族にとっての思い出ほどではないとしても、たとえば幼時の思い出は、異郷にある者にとって癒しの効果をもつ。その幼時期の記憶への憧憬の念に圧倒されないためには、社会的必然への洞察によって自らの伝記的事実の記述を抑制せねばならぬものようである。

『ベルリンの幼年時代』の最初のいくつかの短章は、ブルジョアどころか王か皇帝を連想させるイメージや名辞を含んでいる。これは思い過ごしなのだろうか。第一番目の「歩廊」は、先にも述べたように、王のイメージを確かに暗示している。第二の短章の標題は「カイザー（皇帝）パノラマ」である。第四の短章「電話」には、栄光の道へと至る双子の兄弟についての言及があり、これはレムス・ロムルス兄弟が連想される。第六の短章「ティアガルテン」はクノッソスの迷宮に入ったテセウスとのつながりが考えられる。

1900年前後のベルリンにおけるベンヤミンの経験は、たんにブルジョアという語彙から連想される以上に、幼年時代の全能感と社会階級上の全能感を有していたように思える。ベンヤミンが強調する幼年期の「安らぎ」にもこのような側面を加味して受けとらねばならないだろう。

『ベルリンの幼年時代』の終りの部分三分の一の短章では、盗難、貧民、犯罪と事故、性の暗い予感、世界存在への懐疑といった、いわば生の否定的側面が扱われてい

る。全体としては、だから、陽から陰への素材配置がなされているといえよう。

メニングハウスは、ベンヤミンの思考と生き方にわたって「しきい」の概念を重視している。4)貧民と接する機会の少ないベルリンのアルター・ヴェステン地区の環境から、プロレタリアートへ歩み寄るにあたって、ベンヤミンが二つの階級のあいだの「しきい」とどまったとするなら、二つの階級のもつ距離が、一般に考えられる以上に、ベンヤミンにあっては、大きかったと言われなければならないだろう。若きベンヤミンのパトロン的存在であったホフマンスタールの生の軌跡を「宮殿から街路へ」(R・アレヴィン)と形容するとすれば、ベンヤミンの生の軌跡もそれに近い傾きをもっていただように思われる。自らのポートレートと称した「歩廊」のなかで、ベンヤミンは、住居と街路のいわば「しきい」である「歩廊」に自らの墓をしつらえてみせてある。

註

- (1) Benjamin : Briefe , S .589. Frankfurt a.M. 1966
- (2) Witte, B.: Bilder der Endzeit. DVJS.1984
- (3) Benjamin : Gesammelte Schriften, IV.1.S.400f
- (4) Menninghaus, W:Schwellenkunde (Suhrkamp, es. 1349)

付記

『ベルリンの幼年時代』の引用箇所、晶文社版を参照した部分がある。

(1993年7月9日受理)